

機関名	慶應義塾大学		機関番号	32612	拠点番号	D09
1. 機関の代表者 (学長)	(ふりがなローマ字) seike atsushi (氏名) 清家 篤					
2. 申請分野 (該当するものに0印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域>					
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	論理と感性の先端的教育研究拠点形成 (Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility)					
研究分野及びキーワード	<研究分野: 心理学> (実験心理学)(論理学)(認知神経科学)(文化人類学)(言語学)					
4. 専攻等名	社会学研究科心理学専攻、社会学研究科教育学専攻、社会学研究科社会学専攻、文学研究科哲学・倫理学専攻、文学研究科美学美術史学専攻、政策・メディア研究科政策・メディア専攻					
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)	理化学研究所・脳科学総合研究センター、ケンブリッジ大学・実験心理学、ウイーン大学・認知生物学、ピーレフェルト大学・動物行動学、エコール・ノルマル・シュベリユール・論理学、嘉泉医科大学・神経科学研究所、南フロリダ大学・心理学、マッギル大学・文化人類学					
6. 事業推進担当者	計 34 名 ※他の大学等と連携した取組の場合：拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [76 %]					
ふりがなローマ字 氏名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門・学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
Matagabe Shigeru (64)	社会学研究科心理学専攻・教授	実験心理学、神経科学・文学博士	全体の統括、研究施設の統括、教育研究プログラム(脳と進化)			
Sugura Noriyuki (64)	社会学研究科社会学専攻・教授	経済学・博士(地理学)	教育研究プログラムの統括、会計統括			
Nishimura Taro (62)	文学研究科英米文学専攻・教授	西洋古典学・文学修士	教育研究プログラムの統括			
Kojima Syouzou (68)	社会学研究科心理学専攻・非常勤講師	実験心理学、認知神経科学・文学博士	研究成果発信支援・評価プログラムの統括、教育研究プロジェクト(脳と進化)			
Yamamoto Junichi (55)	社会学研究科心理学専攻・教授	発達心理学、臨床発達心理学・文学博士	広報委員会の統括、拠点維持の検討委員会統括、教育研究プログラム(遺伝と発達)			
Ando Juko (54)	社会学研究科教育学専攻・教授	行動遺伝学・博士(教育学)	教育研究プログラム(遺伝と発達)			
Otsu Yuuki (64)	社会学研究科教育学専攻・教授	言語心理学・Ph. D.	教育研究プログラム(言語と認知)			
Imai Mutsumi (52)	政策・メディア研究科政策・メディア専攻・教授	認知科学、言語心理学、発達心理学・Ph. D.	教育研究プログラム(言語と認知)			
Miyasaka Keizo (63)	社会学研究科社会学専攻・教授	文化人類学・文学博士	教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Toyama Kouichi (52)	文学研究科美学美術史学専攻・教授	西洋美術史・文学修士	教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Okada Mitsuhiro (57)	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	論理学、情報科学・文学博士	教育研究プログラム(論理・情報)			
Umeda Satoshi (43)	文学部心理学専攻・准教授	認知心理学、神経心理学・博士(心理学)	教育研究プログラム(脳と進化)			
Itoh Yuji (57)	社会学研究科心理学専攻・教授	認知心理学・博士(心理学)	教育研究プログラム(言語と認知)			
Yamazaki Yumiko (40)	社会学研究科・特任准教授	比較認知神経科学・博士(心理学)	教育研究プログラム(脳と進化)			
Fujisawa Keiko (33)	文学部教育学専攻・助教	発達心理学・博士(学術)	教育研究プログラム(遺伝と発達)			
Christopher Tancredi (47)	言語文化研究所・教授	言語学(意味論)・Ph. D.	教育研究プログラム(言語と認知)			
Kitanaka Junko (42)	文学部人間科学専攻・准教授	医療人類学・Ph. D.	教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Nishiwaki Yosaku (64)	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授、文学研究科委員長	科学哲学・文学博士	教育研究プログラム(論理・情報)			
Tarui Masayoshi (64)	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	生命倫理・文学博士	倫理委員会の統括、教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Iida Takashi (63)	文学研究科哲学・倫理学専攻・非常勤講師(名誉教授)	言語哲学・文学修士	教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Wolfgang Ertl (46)	文学部倫理学専攻・准教授	倫理学・Ph. D., Habilitation	国際教育研究プログラムの統括、教育研究プログラム(論理・情報)			
Notomi Noburu (47)	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	哲学・Ph. D.	教育研究プログラム(論理・情報)			
Saito Yoshimichi (54)	文学研究科哲学・倫理学専攻・教授	現象学、西洋近・現代哲学・博士(哲学)	教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Kawabata Hideaki (37)	文学部心理学専攻・准教授(社会学研究科心理学専攻・講師)	神経美学、感性心理学・博士(人間環境学)	教育研究プログラム(脳と進化)			
Nara Masatoshi (52)	文学部倫理学専攻・教授(文学研究科哲学・倫理学専攻・講師)	倫理学、医療倫理学・文学修士	教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Goto Fumiko (46)	文学部美学美術史学専攻・准教授(文学研究科美学美術史学専攻・講師)	西洋美術史、感性教育・修士(美学)	教育研究プログラム(哲学・美学・文化人類学)			
Sakagami Takayuki (58)	社会学研究科社会学専攻・教授	行動分析学・文学博士	教育研究プログラム(脳と進化)			
Nakagawa Sumio (54)	平成22年4月9日逝去	西洋古代中世哲学・文学修士	教育研究プログラムの統括			
Iriki Atsushi (54)	理化学研究所・脳科学総合研究センター・グループディレクター	神経生理学、歯学・博士(医学)	国内連携拠点統括			
Nicola S. Clayton (49)	ケンブリッジ大学実験心理学・教授	実験心理・Ph. D.	海外連携拠点			
H-J Bischof (65)	ピーレフェルト大学動物行動学・教授	動物行動学	海外連携拠点			
Jocelyn Benoist (43)	エコール・ノルマル・シュベリユール・論理学・教授	論理哲学・Ph. D.	海外連携拠点			
Thomas Bugnyar (40)	ウイーン大学認知生物学・教授	認知生物学・Ph. D.	海外連携拠点			
Zang-Hee Cho (75)	嘉泉医科大学・神経科学研究所・教授	応用物理学・Ph. D.	海外連携拠点			
Shimizu Toru (54)	南フロリダ大学・心理学専攻・教授	心理学・Ph. D.	海外連携拠点			
Allan Young (74)	マッギル大学・文化人類学・教授	文化人類学・Ph. D.	海外連携拠点			
Richard Frackowiak (64)	エコール・ノルマル・シュベリユール・認知科学科長・教授	機能脳画像科学、認知科学・Ph. D.	海外連携拠点			
Ludwig Huber (47)	ウイーン大学神経生物学・教授	比較認知・Ph. D.	海外連携拠点			
Jean-Pierre Jouannaud (66)	エコール・ポリテクニク・情報科学研究所・教授	情報科学・Ph. D.	海外連携拠点			

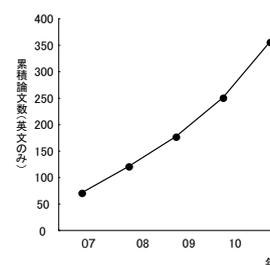
機関（連携先機関）名	慶應義塾大学、理化学研究所・脳科学総合研究センター、ケンブリッジ大学・実験心理学、ウィーン大学・認知生物学、ビーレフェルト大学・動物行動学、エコール・ノルマル・シュペリユール・論理学、嘉和医科大学・神経科学研究所、南フロリダ大学・心理学、マッギル大学・文化人類学	
拠点のプログラム名称	論理と感性の先端的教育研究拠点形成	
中核となる専攻等名	社会学研究科心理学専攻	
事業推進担当者	（拠点リーダー）渡辺 茂・教授	外33名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本拠点の目的は「論理と感性」の先端的教育研究を海外の有力な教育研究機関と連携して世界最高水準で行う拠点を形成することである。グローバルCOEでは、21世紀COEでの評価が高く、人文的研究と実験的方法の融合が効果的に機能した分野の課題として「論理と感性」に特化した先端的教育研究を行う。ヒトの判断には論理的アルゴリズムによる判断と感性による直感的判断があり、両者の関係は認識論の古くからの課題であるが近年の認知科学、神経科学の発展は、判断における論理と感性が独立した過程ではなく、ひとつの系として、ある時は相互補完的に、ある時は対立的に働いていることを示しつつある。論理や感性のプロセスは必ずしも意識化できる過程ではなく、脳科学的アプローチが必須であり、言語や文化による制約も大きい。本グローバルCOE拠点では、判断における論理と感性の統合を、最も基礎にある生物学的レベルから文化レベルまで、総合的に理解しようとする。具体的には、1) 論理と感性の生物学的基礎、2) 論理と感性の遺伝と発達の变化、3) 認知・言語と論理・感性の関係、4) 哲学・美学における論理と感性およびその文化的制約、5) 論理と感性の論理学的表現、という5点を明らかにする。そして、その研究に参加することを大学院の履修科目とし、複数指導体制の教育を通じて実験科学的技法をもった人文研究者、人文科学的な知性を身につけた実験研究者を育成し、国際社会に送り出す。心の問題は現代社会におけるもっとも緊急に解決しなければならない課題のひとつであり、本拠点はそのような問題の解明に対応できる深い知識、幅広い視野、国際レベルの先端的技術を併せ持つ研究者を育成するものである。</p> <p>〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕</p> <p>本拠点は論理と感性の教育研究の中心に「教育研究プログラム」を設置し、大学院との密接な連携のもとに教育研究を行った。それをハード面で支えるものとして「教育研究施設」、ソフト面で支えるものとして「研究成果発信プログラム」、「国際教育研究プログラム」などを設置した。</p> <p>「教育研究プログラム」: 脳と進化、遺伝と発達、言語と認知、哲学・美学・文化人類学、論理・情報の5チームを設置し、拠点リーダーのもとに論理と感性についての先端的教育研究を展開する。大学院生はこのプログラムを大学院科目として履修し、研究の実践を通じて分野融合的研究のすすめ方を習得する。48名がこの科目を修了した。</p> <p>「教育研究施設」: 本拠点は人文科学の拠点であるが、実験科学との融合的教育研究のため、いくつかの実験施設を設置した。MRI実験施設は平成20年10月から稼働を始め、平成23年2月まで稼働した。発達研究施設ではNIRS、Tobiiなどを装備した。また、医学部総合医科学研究棟内にマーモセット実験室（平成22年度に理化学研究所内に移設）、つくば市に野外実験施設を設置した。</p> <p>「研究成果発信プログラム」: 若手研究者の国外での研究発表を支援するもので、論文作成の指導から査読者とのやり取り、研究費の申請まで、海外の第一線で活動するための戦略的指導まで行う。この支援プログラムの結果、198篇の若手英文論文が作成された。</p> <p>「国内連携」: 理化学研究所・脳科学総合研究センターの「象徴概念発達研究」チームと連携し、マーモセット実験室を運営した。また理化学研究所でも計3名の学生・院生が実験を行った。</p> <p>「海外連携」: 本拠点の教育研究に効果的に連携できる先端的教育研究機関と提携関係を締結している。2008年には南フロリダ大学、嘉泉医科大学と新たに連携協定を結び2011年度にはマッギル大学とも連携し、最終的に15拠点到海外連携拠点を増やした。</p> <p>「国際教育研究プログラム」: 上記の海外連携拠点を中心に若手研究者が共同研究や発表を行うもので、Keio-Cambridge Joint Seminarを英国でKeio-Gachon Joint Seminarを韓国と慶應で、Keio-USF Semiarを米国でそれぞれ定期的に開催した。また、海外での国際会議などへの若手研究者の派遣も計42件行った。</p> <p>「大型国際シンポジウム」: 毎年度テーマを決めて世界最先端の研究者達を招聘して3日にわたるシンポジウムを計5回開催した。また、その成果は英文単行本として出版された。</p> <p>「広報」: 年4回のニューズレターの発行、年1回の英文論文集CARLS Series of Study on Logic and Sensibilityを計5巻発行した。掲載されているオリジナル論文は189篇にのぼる。また、一般向けシンポジウム(5回)、プレスリリース(14件)などを積極的に行った。</p> <p>「ネットワーク形成」: 学内の医学研究科、システムデザイン・マネジメント研究科のグローバルCOE2拠点とネットワークを形成し、「人間知性研究センター」を形成した。さらに、他大学の心に関するGCOE拠点と「心に関するグローバルCOEネットワーク」を構築し、全日本の心に関する教育研究ネットワークを形成するため、日本心理学会大会で共催シンポジウムを連続して行った。</p> <p>「若手研究者の雇用と経済支援」: 延べ、特任准教授20名、特任研究助教25名、研究員64名を雇用した。</p> <p>「外部評価委員会」: 拠点外の委員からなる評価委員会を設置し、教育研究の内容から運営まで幅広い評価・助言を求めるもので、平成20年度に書面およびヒアリングによる外部評価、また平成23年度に書面による外部評価を行った。その結果、順調にプログラムが進行しているという評価を得た。</p>		

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

1) 英文論文の出版

研究成果は英文論文数として定量的に捉える事ができる。右図に拠点発足以来のすべての事業推進担当者の英文論文数を示す。総計355篇を超え、極めて積極的に研究を行ったことが分かる。拠点独自の論文集としては年度毎の英文シリーズCARLS Series of Study of Logic and Sensibilityを5巻出版し、これらには総計189篇のオリジナル論文が掲載された。特に右図で示したように若手の論文数はこの5年間で加速しており、本拠点が若手育成の国際拠点であることを示している。



2) 大型国際シンポジウムの開催と成果発信

先端的研究者との直接討議も国際拠点の形成に欠かせない。そこで、毎年度にテーマを決めて先端的研究者を招聘して大型国際シンポジウムを開催した。さらにその成果を国際的に発信するために、シンポジウム終了後にCARLS Seriesの出版とは別に6冊の英文単行本を出版した。この中には”Comparative Study of Emotion”のように国外出版社(Springer)から出版されたものもある。これ以外に個別テーマの国際研究集会を120回行っている。これらのことは拠点が国際的な情報の中心として機能したことを示す。また、国際プラトン学会では、納富教授が2007-10年に会長を務め、2010年8月に慶應義塾大学三田キャンパスで開催した第9回プラトン・シンポジウムでは、世界のトップ研究者約130名と日本の研究者・学生多数が参加して1週間にわたって議論をした。本拠点は共催団体として協力し、「市民公開講座:プラトン哲学の現代的意義 — 『ポリテイア』(国家篇)を中心に—」を開催した。本拠点はプラトン哲学研究の拠点として世界の研究者の注目を集めている。

3) 外国人研究者の訪問および研究者派遣

国際拠点としては外国人研究者の訪問および拠点からの海外への派遣も重要な成果であった。拠点を訪問した外国人研究者は147人(16カ国)であり、中長期に滞在して研究活動を行った者は7人、拠点と雇用関係を結んだものは1人であった。一方、拠点から海外に派遣した研究者は136人(17カ国)であり、これらのことは拠点が相方向的に人的交流を行ったことを示す。また、拠点リーダーは9カ国、16回の海外出張を行い、すべての連携協定先で担当者と直接研究協力の交渉を直接行い、国際拠点形成のための活動を行った。

4) 国際的情報発信

論文出版とは別に国際拠点としてプレス・リリースは原則として大学広報部を通じた国際リリースとし、総計14件行った。また、平成20年度からは年4回発行するニューズレターに英文要約をつけた。同様に拠点ホームページにも英文版を用意した。

5) 国際共同研究

国際共同研究も拠点形成の成果と考えられる。9つの海外連携拠点とはもちろん共同研究が行われたが、それ以外にもカナダ・ヴィクトリア大学(対人メタ認知研究)、カリフォルニア大学サンタバーバラ(画像記憶における言語隠蔽効果)、精華大学(NIRS反応の比較)、ハーヴァード大学とCNRS(陰影表現の研究)、UCSD(機軸行動発達支援法の日米共同研究)、コロラド大学(行動遺伝学共同研究)、トロント大学(Mass-Count Distinction についての共同研究)、カリフォルニア大学(UCSD)(自閉症の発達支援研究)、ユネチカット大学、中国、香港、オランダ、オーストラリアなどの認知科学研究センター(言語学) オックスフォード大学(カント哲学の現代的評価)などと共同研究が行われた。また、抗うつ剤の普及が感性におよぼす影響をアジア、南米、北米で比較するプロジェクトが英国、北米の医療人類学者・医学史家との共同研究で行われた。さらに、米国、欧州のオントロジー研究機関と協力し、フォーマルオントロジーの共同研究を進めた。

6) 国際的評価の高いトランスレーショナルな成果

脳科学(特に小児NIRS)、比較認知科学(特に鳥類認知研究)、発達科学(特に障害研究)、論理学(特に線形論理)、美学(特に陰影研究)、文化人類学(特に医療人類学)などの分野で、多くの国際的評価の高い成果をあげたが、ここでは国際的に評価されているトランスレーショナルな成果について述べる。論理と感性の研究のトランスレーショナルな分野のひとつとして裁判が考えられる。特に裁判員制度という日本独特の制度における人の判断過程の分析は、陪審制を採用している国では考えられない重要な側面を持つ。これらの問題を中心に2度の国際会議におけるワークショップを企画・参加することを通し、国際的にもアピールしてきた。同じように言語教育も本拠点のトランスレーショナルな分野であるが、大津を中心にしたメタ言語意識を基盤に据えた言語教育のアイデアはすでに香港、中国、オーストラリアなどで注目されており、大津はこれらの地域で招待講演を行い、言語教育において主導的な役割を果たした。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	慶應義塾大学	拠点番号	D09
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称	論理と感性の先端的教育研究拠点形成		
中核となる専攻等名	社会学研究科心理学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)渡辺 茂	外 33 名	

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、大学の将来構想を推進する上で、本拠点の形成を慶應義塾大学における世界最高水準の教育研究拠点形成計画として位置付け、塾長の強力なリーダーシップの下で学内組織の整備統合を行い、人的・経済的基盤の充実に努め、国際的に卓越した教育研究拠点形成への重点的取組を行ったことが高く評価される。

拠点形成全体として、拠点リーダーを中心にしたマネジメント体制は、人文科学的知性と実験科学的技法を併せ持つ分野融合型若手研究者の育成に効果的に機能したとみなせる。

人材育成面については、拠点の事業推進担当者が担当する大学院プロジェクト科目を教育の柱として、多様な講習会等を開催することにより、分野融合型の研究者の育成に効果をあげている。また、多くの海外拠点との活発な研究交流に若手研究者の参加を促し、国際的に活躍する研究者を育成したと認められる。しかし、事業推進担当者が指導教員となる博士課程修了者数は少なく、この点では教育の効果が得られたとは言い難い。

研究活動面については、本拠点の研究目標を達成するために設けられた、神経レベルから文化レベルまで5つのアプローチごとに多様な研究が進められ、概ね目標が達成されている。しかし、分野融合研究の成果が問われる人間性に関する分野の創成については必ずしも十分とは言えず、課題を残している。毎年多数の英文論文が発表されるなど研究活動の生産性はきわめて高く、活発で国際的な研究活動の成果が認められる。

中間評価結果による留意事項等への対応については、対応は概ね適切であったが、人間性についての分野融合型研究の導入にもかかわらず、人間性の一般的理解に到達するまでに至らなかったことには課題を残している。MRIの導入によって、先端技術への習熟など教育面での成果は認められるが、研究面での成果は物足りない。

今後の展望については、補助事業の終了後も、論理と感性のグローバル研究センターの設置や分野融合型大学院教育により、継続的な教育研究活動の推進が期待できるが、この新しい体制が本拠点をいかに国際的に卓越した教育研究拠点として発展させようとするのか、戦略的な位置付けと運営方針が明確でない。